

京大生の生活と意識について考える ——比叡山討論集会のイブニングセッション記録

梶 田 勲 — (高等教育教授システム開発センター)

このイブニングセッションでの報告の中心は、4回生の意見調査の結果です。この調査は、全学共通科目レビュー委員会の調査小委員会で行ったものです。今日は調査票の設計を中心になってやっていただきました高橋三郎先生、高橋由典先生もこの場に来ておられますので、また後でお話をいただこうと思っています。それからもう一つ、これに関連して準備しておりますのが、卒業生調査の結果です。この2つの調査報告書がお手元にあると思います。また卒業生調査の結果を日本経済新聞で解説したもののコピーもお手元にあると思います。この三つを資料として、一緒に考えてみたいと思います。

【今の京大生はどういう存在なのか】

学生たちが京都大学の教育をどうみているかを、ここではまず問題にしたいわけです。特に一般教育についてなんですが、しかしそれに関連して、専門教育をどうみているかということも含まれます。われわれ教官の側からは、教育の仕組みを新しい時代に応じて、どう整えていくか、という議論を、学内のいろんな委員会で随分やっているわけです。今日の討論集会でも、そういう意見が各分科会で出たと思います。しかし、教育というのは相手のある話です。教育の相手である学生が京都大学の教育をどうみているのか、私たちの相手にしている今の学生たちはどういう種類の人間なのか、これがわからなければ私たちが何を議論しても空回りになってしまう恐れがあるのです。

私は1960年に京都大学に入学しました。60年安保の年ですね。この時の大学進学率は9%です。いまは40%です。大学の専任教員の数も、私が入学した頃と今とでは10倍以上の違いがあります。京都大学の規模も、学生数という点からも教官数という点からも、何倍にもなっているだろうと思います。そして何よりも、60年当時と今とでは学生が変わっています。私が学生の頃は京都大学の学生という汚いということで有名でした。それに比べ同志社の学生がいかにきれいかと、よく言われました。当時の色々な調査によりますと、京大生の両親の経済的なバックグラウンドは必ずしも高くはありませんでした。しかし今や、東大生と京大生の両親の経済的なバックグラウンドは日本のトップクラスにあります。同志社や立命館の学生の両親よりも京大の学生の両親の方がずっと金持ちのことが少なくないのです。だから今の京大生の服装もこざいでしょう。変わったんです。よく学内の委員会で「京都大学のこれからの姿」なんてことが問題になりますと、よく「私の学生の頃は……」ということをおっしゃる方がおられます。もちろん自分の学生の頃の話をしていただいてもいいのですが、学生そのものもそれを取り巻く状況も根本的に話が違ってしまっているわけです。勉強がよくできるという点では同じだという言い方もあるかもしれませんが、できるということの意味も実は変わっているんですね。今は6年制一貫の受験中心の学校から来ている人が非常に増えています。これは東大ではもう6割を越したといっておりますが、京大でもかなりの率になっています。昔は私みたいに田舎の公立高校からも入れたのですが、今はなかなかです。

そういうことで、学生そのものが変化しているということを前提にして、これからの京大の教育をどうしようかを考えないといけない。そしてその際、その変わってしまった今の学生が京都大学の教育をどう見ているかということをも十分に考慮して議論しないといけない。そういう意味でこのイブニングセッションを準備したわけです。

今日、井村総長も最初の御挨拶の中でおっしゃいましたように、今の学生はとてもハッピーです。京都大学4年間の教育に満足感を表明しております。4回生調査の報告書を見ていただきますと、大半の学生が「良かった」と満足の気持ちを表明しています。学部によって少しずつ違いますけど、一番ハッピーなのは「医学部」。でもどの学部でも非常に高い率で「良かった」といっている。ただこれも先ほど井村総長がおっしゃったように、じゃあ何が一番良かったかということになりますと、クラブ・サークル活動、という話になってしまいます。「授業に出て勉強した、自分で勉強した」ということについての実態が示されています。京都大学ではあまり授業に出ないというのも伝統的

な「自由の学風」の一部だという気風がありますが、全般的にそういう傾向が見られます。

【京大生の趣味・読書】

そういう大前提を念頭に置きながら、もう少し学生の今の姿を見ていきたいのですが、例えば趣味は何かという質問への答があります。これを見たときにも「随分私の頃とは違うな」と思いました。やっぱり今の学生は基本的にお坊ちゃま、お嬢ちゃまですね。まあ読書が文学部で70%台にいてるのは当然として、音楽鑑賞がどの学部でも非常に高い。そして音楽鑑賞だけでなく、音楽の演奏が趣味という回答が教育学部では40%台です。今では多くの京大生はバイオリンをやったりピアノをやったりしていて、研究室ごとに音楽会が開かれたりするわけです。優雅ですね。私が学生の時には考えられなかったことです。私たち教官の方にももちろん優雅な方がおられますけど、ダサイ人もおられます。で、毎号決まって読んでいる雑誌、京大生の愛読雑誌は何かというと『ジャンプ』『スピリッツ』『マガジン』です。これも予想はしてたとはいえ、やはり私の学生の頃と比べて大きく違うなという気がしました。私どもの時はわかろうがわかるまいが『朝日ジャーナル』を持って歩いてたわけです。あるいは『世界』といった総合雑誌だったわけです。そして文科系の学生なら、よくわからなくても「サルトルとカミュの論争は」などと話題にしていたわけです。今そんなことを口にしたら「変わり者」扱いされて、仲間に入れてもらえないかもしれません。そうすると教養教育をどうするのかという問題であっても、そうした土台となるところをよくよく踏まえて考えなくてはならないということになります。

例えば多くの学生が『朝日ジャーナル』を読んでいる時代の教養教育と『ジャンプ』『スピリッツ』『マガジン』を愛読している時代の教養教育とでは、話がまったく違ってくると思うのです。科目名は同じであってもいいかもしれませんが。「何々入門」とか「何々概論」とか。だけでも中身は違ったものでなくてはならないはずですが。私が「社会学概論」を学生時代に受けた時はマックスウェーバーの話の色々聞かされたと思います。よくはわからなかったですけど、なかなか……。で、今の「社会学」の一番人気は伊藤公雄さんの「男性解放論」でしょう。1500人ぐらい登録しているんですか。女性解放というのはもう古い、男性が解放されなければならない、ということのようですが。私もマックスウェーバーよりそっちの方が聞きたいですけど。ということで、学生の感性が変化していますから、同じ社会学の講義だとしても、たぶん中身は全く違っているかもしれません。そうするとA群科目として何を提供するかを考える場合にも、このことを念頭に置いて考えないといけないでしょう。

「おすすめのコミックス」というのも調べていますが、私なんか中身はまったくわかりませんけれども、蘊蓄マンガの『マスターキートン』、これが京大生の一番おすすめだそうです。その次はギャグマンガで『動物のお医者さん』。医学部の学生が読んでいるのでしょうかね。本当はこういうものもちらっと見ておかないと、学生の気持ちと噛み合った指導はできないかもしれません。相手の内面世界に響くような働きかけは、こちらの常識だけに頼っていたのでは無理なのです。「この1年間に読んだ本の中で最もよかったもの」としては、『ソフィーの世界』『竜馬がゆく』等が挙がっています。私の知らない本も若干ありますけれど、まあだいたいはわかります。そして、京大生の一番おすすめのゲームソフトは「ぷよぷよ」。私も「ドラゴンクエスト」までは知っていたのですが、残念ながら「ダービースタリオン'96」がどういうものか知りません。「ぷよぷよ」もやったことはありません。しかし、このあたりも知らないといけないのかもしれない。

まあ、こういうことを言い出すときりがありますが、われわれの前に座って聞いている相手はどういう存在なのか、ということを知らないといけないのです。お坊ちゃま、お嬢ちゃまで、我々の読んだことのない本を愛読していて、といったことを考えて、どういう教養を身につけさせたいのかということを考えないと、どうにもならないと思います。それを一番のベースにしまして、今度は卒業生調査の結果の方をすこし見ていただきたいと思います。

【卒業生は京大をどう見ているか】

今の学生は我々が学生時代を過ごしていた頃と随分違うということを大前提にしないといけないわけですが、それをもう少し知ろうということで、去年の秋4つの学部を選びまして（人手とお金の問題があり全学部ではできませんでした）文学部、法学部、工学部、医学部を、2年前に卒業した人、12年前に卒業した人、22年前に卒業した人、32年前に卒業した人、42年前に卒業した人について調査をしました。新制大学になった頃が42年前、それから10年して

60年安保の時代、それから70年の大学紛争の時代、そしておとなしくなった80年、そしてごく最近、ということで、10年ごとの卒業生を選びまして「京都大学で受けた教育をどう思うか」等々の調査をいたしました。

そうすると興味深いことに、「京都大学で受けた講義や演習に満足している」という数字がコンスタントに落ちてきているんです。新制大学になった頃はかなり高いのですが、年を経るに従ってだんだん落ちてきます。4学部とも同じ傾向があります。ただ極めて顕著なのは工学部です。医学部もかなり顕著です。ただ医学部の卒業生の場合に面白いのは、10年前に1度底をうって少しぶり返している。いずれにしても、例えば工学部でいいますと、54年の卒業生のほとんどの人が講義や演習に満足している。ところが満足度がコンスタントに落ちていって最近の卒業生になると20%余りでしかない。これは、昔の卒業生はなつかしくて何でも良く評価するのに対して、新しく卒業した人は印象が新しいから厳しくなる、ということではなさそうです。例えば同じ満足度といっても、自分の出た学部や学科に対する満足度はあまり変わっていません。ですから、卒業してから年が経ったから肯定的に見るようになったんだ、とは必ずしもいえないだろうと思います。何についての満足度であるかで、こんなに差が出ているのです。やはり、最近の卒業生は、京都大学の工学部に入った、医学部に入った、ということには非常に満足しているけれども、中で受けた講義や演習にはあまり満足していない、ということではないかと思います。

4回生調査の方でも同じような傾向が出ていますので、見ていただきたいと思います。例えば「知的な興味をかきたてられた授業があったか」、学部によって違いはありますが一般にかなり厳しい評価ではないでしょうか。卒業生調査の方でも専門科目と教養科目ではかなり違う面が出ていますが、教養教育に対する不満が最近になって高まっているだけではなくて、やはり専門教育に対する不満というものも高まっています。ただ、文学部の卒業生の場合には卒業年次によって余り違いが出ていません。文学部は、規模の点でも、たぶん雰囲気の点でも、よく言えば古典的なものを残しているということかもしれません。他の学部はこの40年ほどの間にどんどん変わってきたことなのでしょう。特に60年安保の後、そして高度経済成長の後の70年代、学生数を増やしてきました。そのため雰囲気も教育体制もどんどん変わってこざるをえなかったのでしょう。この点で特に顕著だったのが工学部です。現在の入学定員3000人の中の1000人が工学部だということで、非常に大きくなっています。そして今日も我々の第4部会でも話がありましたけれども、工学部の先生方はたくさんのコマ数をもって非常にご苦労なさっている。資料があると思いますが、学部ごとに各教官のお持ちになっている平均コマ数が違います。工学部の場合には非常に大きい数字になっています。もちろん何人かで一緒に担当している実験などをどうカウントするか、といった条件の違いもあるかと思いますが、にしても教官本人が自覚すれば、ということだけで済む話ではなくて、仕組みの問題も大きいように思います。この4回生調査の中で、総合人間学部が色々な点で数字が低く出ていますが、これは総合人間学部ができた時の1期生に当たるわけですね。そういう意味で、まだ条件が整備されない時期に学生生活を送ってきた学生として見ていただきたいと思います。

こまかくあげていけば、いろいろと学部ごとに事情というのがあります。ですから、学部間の数字の比較、どこがいい、どこが悪いというふうに単純に比べてはいけなく考えています。条件整備の違いも、かなり大きくあるだろうと思います。ただ大事なのは、京都大学というのは一貫してずっとうまくやってきたのに、大学設置基準の大綱化によって教養部がなくなって総合人間学部になって、そこで問題が発生してきた、という感覚が一部にあるようですがそうではない、ということです。ずっと問題は年次を追って累積されてきているんです。それが今噴出している。そういうふうに見ていかなくはいけません。

【一般教育に対する京大生の意見】

もう少しだけ紹介しておきたいのですが、4回生調書の報告書の方を見ていただきますと、教養教育、一般教育についていろいろ具体的な点での学生の意見が載せられています。今は全学年を通じて一般教育的科目を履修する、というふうになってきたはずなんです、まだ学生の意識としては1、2回生の間にやるものだというのが非常に強い。

授業内容に関心があったからとったのか単位がとりやすいからとったのか、という点での意見があります。よく楽勝科目という言い方があって、単位を楽にもらえるからその科目をとる、という話がありますけれども、必ずしもそうではなく、全体的にいうと内容ということで科目選択している人が多い。ただし、これは非常に大きな学部間の相

差があります。医学部と工学部の場合は、共通科目に関しては単位だけ取れば良いという感じもないわけではありません。そんなことがあるように思います。

それからもうひとつ非常に面白い結果があります。授業担当者が京都大学の専任の教官かどうかほとんど気にしていない、というものです。これは私にとって大きな発見でした。一番多くの学生が履修登録しているのは、先にも話を出したように伊藤さんですね。伊藤さんは京都大学の出身者ですけれども、大阪大学人間科学部の先生です。しかし講義を受ける方は全然どこの先生ということは気にしていない。「男性解放論」という内容そのものが面白いということで受けているわけです。非常勤講師の数を減らさないといけないというレビュー委員会からの提言はあります。確かに仕組みの上でいうと非常勤講師にこれだけ依存しているということはまずい。これは考えないといけない。ただ、学生の方からいうと、非常勤講師であるか専任の教官であるかということは問題でないということを十分認識した上で議論をしないといけない。一部の先生の本音の中には、非常勤講師の方が質が悪いという考えが潜んでいるように思います。質が悪い先生をたくさんそろえて一般教育をしているとは何事か、何て無責任だ、という本音がどこかにあるような感じがします。しかし必ずしもそうとは言えない。そうではなくて、基本的には専任教官が受け持たなければならない、その範囲での教育活動のあり方を本来考えなくてはならない、それなのに十分な謝礼も出さないうまま数多くの非常勤の先生に依存しているといったカリキュラムの組み方は、仕組みの問題としてこれでいいのか、という点から考え議論していかなくてはいけないと思います。

同じことは科目の提供部局、どこが提供しているか学生はほとんど問題にしていけない、ということがあります。だから総合人間学部が提供しているのか、あるいはその他の学部が提供しているのか、といったことを考えないで、これからはもっと各学部からの提供科目を増やすという動きになっていくべきでしょう。

その次は、4回生の現在で全学共通科目を受講している人は、ということです。これは実は各学部によって履修便覧での指導内容が違います。できるだけ1、2回生のうちに取りようにという記述が今でもある学部が、あるようです。そして4年間のうちに、という学部もあります。学部ごとに履修便覧の書き方が違うわけですが、これが学部間の差になって出ているように思います。受講していない理由、本当は4回生でも全学共通科目を受講していいわけですが、なぜ受講していないかと。これは、専門の勉強が忙しいから、単位を取得してしまっているから、時間調整がつかないから、とかいろいろとありますが、一番多いのは単位をすでに取得してしまっているから、という理由です。全学共通科目の理念として、全学年を通して学ぶべきだという人が4割。逆に言うと、6割ぐらいは1、2年だけでいいじゃないか、ということですね。ですから、仕組みは変わってきているわけですが、学生の意識の中ではまだまだ変わっていない部分が大きい、と思います。

【どのような授業を高く評価しているか】

全学共通科目について肯定的評価をしているか否定的評価をしているか。全体的に言えば半々です。ただしこれもまた学部間で大きな違いがあります。専門教育に非常に大きくウェイトがかかっている（学生の意識の中でも）学部と、そうでない学部の違いかもしれません。

全学共通科目の授業によい授業があったと答えた人がどのくらいあるか。なかなか学生の評価はシビアです。「少しあった」というのを入れれば「良かった」という回答が7割を占めますから、喜んで良いのかもしれませんが、もちろん改善の余地はあるわけですから、機会を見つけては話し合いをしないといけないでしょう。

じゃあ何をもって良いとしたのか、どういう授業が良かったのか。これがいろいろとありますが、一番大きかったのが、「未知の世界の話が聞ける」。やはり大学に入りますと、高校とは違うぞというものが欲しい。学問の香りとか学者の雰囲気とか、何か違うものに触れたい。こういう要求がここに反映しているのではないかと思います。それからもうひとつ、「教官の話し方」というのがかなり大きなウェイトを占めています。これは、研修会をやったものでもありませんけれども、しかし真剣に考えてみないといけない問題だと思います。私どもの高等教育教授システム開発センターで、何度か、学生はどういう講義や演習を望んでいるのかというニーズについての調査をやりました。これは京大生だけではなくて、大阪大、大阪外大の学生にも実施しまして、600人ぐらいを対象にしました。これはどういうやり方をしたかという、今までに受けた授業でどういうのがよかったか具体例を出してもらいまして、それでどういう意味でよかったのかということを理由を書いてもらいました。その反面、どういう授業が嫌だっ

たか、どういう点が嫌だったかということも書いてもらいました。それを内容分析いたしますと、教官の人柄、語り口、に関するものがずいぶんありました。教官そのものの在り方が学生にとって大きな意味を持っているんだな、ということであらためて感じさせられました。逆に嫌な点というのは、学生を馬鹿にしたような話し方をするとか、講義や演習のし方がいかにげんだとか。意外に見ているんですね。私も6、7月になりますとどうしても疲れがこんできまして、学生に対していかにげんになりそうな感じがあるので反省しなければなりません。

そういう意味で、教える側の在り方を今一番厳しく問い直しているのは小学校ですね。中学校の場合は、教員自身の問い直しのないままいかにげんなことをやっていますとすぐ荒れます。だから、この夏にずいぶん、小中の教員が自分たちの在り方を問い直す研修会が開かれています。やや段差があって高校ですね。しかしそれでも各地で高校の教員が自分の教育者としてのあり方を問い直す研修会が開かれるようになりました。なぜか。子どもの数が少なくなっていく中で高校がつぶれていくからです。次は大学でやる番でしょうね。しかし大学の教員というのが一番難しい。みんな偉い学者先生で、生身の先生から講義を聴かせてもらっているだけでも光栄だと思え、つまらないとか退屈だなんて生意気だ、という感じがあります。しかし、面白くない話でも聞かせていただくだけで生涯の名誉だろう、と思っているのは当の教官だけで、学生は全然そう思っていないのです。

ご承知かと思いますが、今一部の大学では非常に危機感を持っております。私立大学の方が早くから危機感を持って改革に取り組んできたのですが、国立大学でも始まりました。特に地の利の悪いところにある国立大学は、気を緩めたら入学志願者が減ってつぶれてしまう恐れがあります。地の利は良くても伝統にあぐらをかいているだけで社会的な評判が落ちてきますと、つぶれる可能性があります。私どもの高等教育教授システム開発センターにでも、いろいろな大学から相談を受けたり、あるいはセンターの者が交代でいろいろな大学に話にいったりしますけれども、国立大学でもずいぶんこういう会が増えています。御存知だと思いますが、大学教員を対象とした研修をFDと言うんですね。「FDといったら、フロッピーディスクか」と言う人もいますけれど、ファカルティ・デベロップメントの略なんですね。大学というのは何でも格好をつける場所ですから。

ともかく、どういうふうにしたら知的刺激のある講義演習ができるか。それに加えて、語り口から人柄から、どうやったら学生を馬鹿にしたように受け取られなくて済むか、どうやったら手抜きをしたように受け取られなくて済むか、考えていかななくてはいけない。よく文部省はシラバスを作ればいいのか、学生による授業評価をすればいいとか言いますが、そういうことだけでは駄目なんです。文部省に行きますと担当の課長さんの机の上に各大学のシラバスが、これみよがしに積んであったりします。私どもが行きますと、京都大学のシラバスや学生の評価結果はいつここに積むことになるのでしょうか、などと言われることがあります。それぞれの大学で事情が違いますんでね。私は敢えて言いますが形式的な点で足並みをそろえる必要は全くないと思います。ただし実質的な意味で、どうやって本当に学生にピンときてもらおうか、面白いなと思ってもらうか、本音のところで尊敬してもらおうか、これは我々も真剣に考えていかななくてはいけないだろうと思います。

【一般教育のカリキュラムについて】

さて、今日各分科会で論議していただいたことに関係する学生の意見が他にもあります。A、B、C群各科目についてどういうふうを考えているかです。A群科目は60%近くが必要だと言っています。ちょっとB群科目の数字は下がりますけど。これから問題になるのが、D群科目（スポーツ実習）でしょう。もちろん、学生が要求するから提供する、要らないと言うから提供しない、ということでは必ずしもないわけです。提供する側の論理がある、教える側の論理がある。だから、学生の意見通りにしなくてはいけないということではありません。ただ、論議を展開していく際の大事な資料としては役立つだろうと思います。

外国語は8割くらいがやらないといけないと言っております。ただその中で英語をやるべきだという人が9割、2カ国語が必要だという意見は少なくなっています。それでも4割の人は2カ国語が必要と言っています。

それからスポーツ実習を必要という人は約半数、これも学部間のばらつきが大きく出ています。医学部と薬学部ではほとんどが必要ないという意見になっています。ただし、医学部では学生のスポーツクラブが非常に盛んでして、これは前の方の頁を見ていただきますとわかりますけれども、スポーツを趣味にしている人は医学部が一番多いと思います。そういうこととの関係づけながら見ていただきたいと思います。つまり、授業では要らない、自分たちでやる、という

のが医学部のようです。

これは新しい傾向として受け止めるべきだと思いますが、音楽、絵画、映像、こういう実習科目を受講したいという人が6割以上いる。筑波大学のように芸術系の学群があるところは、これをかなりやっているように聞いておりますけれども、京都大学ではなかなか音楽だ、映画だ、映像だ、と言われても難しい点があるように思います。ただ学生の方でこれを非常に要求しているわけですから、将来の一般教育のあり方としては十分考えていかなければならないでしょう。今はどうしても、以前の教養部の延長上で一般教育の科目構成とか領域構成を考えているわけですが、やはりある時期になったら、新しい時代に本当に相応しい「一般教育とは何か」「教養教育とは何か」を論議しなくてはならないと思います。その時にはこの辺を本気で考えてみないといけないでしょう。特に古代ギリシャ以来、音楽は教養の大事な一部だったわけです。特に今の学生達の多くが、趣味として音楽を楽しんでいるということもあります。あるいは映像、絵画も、現在のビデオブームとの関連で考えてみるべきでしょう。

「これからの改善点は」ということですが、「今のままでよい」という人は非常に少数派です。やはりいろいろな点で、今の全学共通科目については学生の側からも強い要望があるということを私たちはきちんと受けとめるべきでしょう。例えば実用性の高い科目を増やすべきだという意見もあります。これは嫌がる先生も多いと思います。大学は専門学校とは決定的に違うんだということもありますが、今はダブルスクールの傾向が京大生にもずいぶんあるのです。やはり同年齢層の45%もの人が大学に行くようになった時代には、実用性ということ、実際に世の中で役に立ちそうな科目も欲しいというの、自然な要求かなと思います。ただし救いは、その隣にその半分以上ではありませんが、「学術的にレベルの高い科目を増やすべき」という要求があることです。これはたぶん京大生の特徴かもしれませんが、よその大学でも同じような調査をやっておられて時々私も目を通しますけれども、あまりこういう要求は出てきていないように思います。

4 回生調査報告書の最後のところに、自由記述の形で回答がカテゴリー分けしてならべてあります。これは高橋三郎先生が非常にご苦労なさって内容分析をしていただいたものですので、またご覧いただければと思います。非常に大雑把ではありますが、まずそういうことで、皆さんにいろいろとお考えになっていただく上でのネタになりそうなことを紹介してみました。

【主要な質疑と補足発言】

ここで、ご意見、ご質問をいただきたいと思います。高橋三郎先生もおられますので、高橋三郎先生の方にご質問をしていただいても結構だと思います。何かございませんでしょうか。あるいは感想でも結構です。

[高橋三郎先生]

何度も私の名前が出てきましたけれども、調査票の原形はこちらにおける高橋由典先生と私とで作りましたが、小委員会でも論議していただきましたし、レビュー委員会でも承認されていますので、別に私が作ったということではないのですが……。

梶田先生はこれから後の議論を面白くするために非常に挑戦的に解釈をなさいましたけれども、この調査の基本コンセプトは解釈なしなんです。これをお読みいただければわかると思うんですが、これは問題提起ということ。これは調査に携わった方は理解していただいたわけです。これは梶田先生が最初におっしゃいましたように、相手の学生が何を考えているのか、どういう学生を我々は対象にしているんだ、を知ることを一番の目的にしましたので、そういう調査になっていると思います。ですから、解釈をめぐってはどこでも議論をしていないわけですから、ここでの数字は、例えば4割というのを「4割も」と読むか、「4割しか」と読むのか、これは先生方がお考えになればいいことだと考えています。これがこの調査のコンセプトでありますので、それだけご理解いただきたい。調査の在り方に関しては、いろいろ議論がありうるだろうというのは想像がつくんですが、もしご質問なりご批判なりがあれば、こちらのコンセプトは申し上げますが、それくらいにしておきたいと思います。

[高橋由典先生]

あまり僕は申し上げることはないのですが、ただ先ほど梶田先生がおっしゃった中にあった、学生達のがユースカ

ルチャーについての分類のことで、教育学部の子安先生などの方々にも知恵を出していただきましたが、実際は学生達自身にかなり知恵を貸してもらっていますので、内容や分類の仕方にも現在の学生が考えていることがそのまま反映されているんじゃないかと思います。

〔高橋三郎先生〕

ある先生から、この調査はけしからん、学生におもねてると言われました。あれは3部構成になっているんですけども、アニメなんかを聞いているとはけしからんというわけです。わかってないなという感じがします。また、私はずっと教養暮らしですから、学部間の差というのはある程度わかるわけですね。工学部の学生と農学部の学生の違いもわかっているつもりです。だから、この調査結果にそう意外性はありませんでした。ともかくこの調査で学部間の差があるということをおさらいしていただいたらいいのではないかな。つまり我々はずっと教養で一般教育をやってきましたのでみんな知っているわけですが、自分の学部の学生しか知らない先生方は、やっぱり自分のところの学生が「なぜこうなんだろう」というふうに、一人一人お考えいただければ、と思います。

〔梶田〕

私も実を言うと、京大生というひとつのタイプがあるとばかり思っていたんです。ところがこれで見ますと、もちろんタイプもあるでしょうけれども、それ以上に学部の違いの方が大きいんじゃないかという感じがします。あまり解釈しすぎるなと言われるかもしれませんが、私の印象はそうです。ですから「京都大学の教育は」ということをもちろん考えないといけないんでしょうが、それ以前にやっぱり「京都大学何々学部の教育は」ということをもっと考えないといけないのかな、と思ったりしました。

学部の間の差が出てくるについては、大きな要因として二つ考えられると思います。一つは、それぞれの学部の教育です。例えば医学部の4回生ならすでに2年間の専門教育を受けていて、そこでやっぱりものの見方の枠組みができていだろうと思います。もう一つは、今の学生は入学する時からどここの学部に入るんだ、という意識がかなりあるのではないかな。学部によって人種が違うんだ、という言い方をする人もいます。例えば入学したとき、いろんな学部の学生と一緒にやっているようですけども、自分は何学部の学生だと言いたがることがあります。そしてなるほど1回生の時から何かその学部のカラーがあるな、という感じがすることがあります。こうした二つの要因が重なったところにこういう学部間の差が出てくるのかな、という気がします。例えば趣味なんかの違いは、入学後の学部の雰囲気の影響とアイデンティティなり人種なりの違いとの双方によって徐々にそうなるのかな、という気がします。

〔長尾眞・工学部長〕

ちょっと話題が変わることになりますけれど、工学部の話がだいぶ出ておりますので発言します。調査結果を見まして、工学部の学生は確かに他の学部の学生と比べると少しいろいろ問題がありそうだなという感じが致しました。それからもう一つ一番気になりましたのは、「知的刺激を受ける講義がどれぐらいあるか」という点で工学部が一番悪く、ほとんど知的刺激のある講義がない、という結果になっていたわけですが、工学部の技術を教える内容の中で、知的刺激を常に与えながら講義ができるようにどうしたらできるのか、それをむしろ教育学のベテランの先生方から教えていただきたいという気がします。やっぱり実務的な技術内容をきっちり教えていく中で、毎回毎回学生がなるほどこれはおもしろいと思うような教え方というのはどうしたらいいのか、率直なところ私どもはほとんどわかっていないのではないかなという感じがします。ところが一步社会に出まして、会社の人達から色々聞きますと、京都大学の工学部出身の学生は非常に実力がある、いろんなことに対してきっちりとやっていっている、他の大学の工学部の学生なんかと比べるとはるかにいい、これはちょっと言い過ぎかもしれませんが、そういうことをよく耳にするわけです。そうすると学問に王道なしといいますが、苦い薬を飲みながらもやっていって、興味がなくてもやっぱり講義を聞いて学習をしていくのか、それとも毎回興味ある教え方をするけれども基本的内容があまりなく、基本的能力がつかないで卒業していくのか、そのへんのところをどういうふうに評価したらいいのか、率直なところ教師としてわかっていない面が非常に多くて、自信がない面もあるわけですね。そんなこともありますので、私個人の考

えですけど、工学部の教官全体がどう思っているかわかりませんが、教育の方法論に関して工学部の私どもにももっといろいろ教えていただく必要があるのではないか、というふうに思っております。

[梶田]

東大の理工系の教官が中心になってやっておられる理工系大学院改革研究会というのがあります。これに私も入れていただいて、そこで関係者のヒアリングとかいろいろな活動に参加させてもらいました。その中で一つ興味深かったのは、大阪大学の工学部・基礎工学部・理学部が年度末に、学生から講義などに対するフィードバックを取ろうということで授業評価を実施しておられるということです。例えば15個ぐらいの評価項目を準備して、非常によくわかる・ややわかる・どちらでもない・ややわからない・とつてもわからない、といった形で学生に講義や演習・実習の評価をさせるわけです。これは非常に簡単なやり方ですが、学生からのフィードバック情報としては表面的で定型的で、必ずしも十分なものにならない。やっぱり、私は自由記述の方が優れているのではないかと考えております。例えば、講義とか演習の後で「感想でも意見でも何でもいいから5行でも30行でも書いてごらん」と書かせるやり方です。実は私自身もう10年ぐらいそれをやっています。そうすると私の方で気がつかないことをいっぱい書いてくれます。いずれにせよ、学生からのフィードバックを何らかの方法でとって、それを参考に自分の講義や演習、実習のやり方を工夫する必要があると思うのです。先生方が集まってあでもないこうでもない議論してみても、たぶん何も出てこないだろうと思います。学生が言うことをそのまま信用する必要はありません。「なるほど、そういう見方もあるのか」と思えばいいのです。法学部では一度、自治会が学生による全教官の授業評価をやりましたね。見開き2頁に、教官の名前と担当科目があって15項目での授業評価があって、コメントがあって、似顔絵があって。今から5年くらい前ですか、私もあの冊子のコピーを大事にしております。あれもフィードバックとしてはいいようなものですが、自分の評価結果が公開されるということによる各教官の感情という要素が入ってきますので、どうかなと思います。下手をすると、教官の方にトラウマ（心的外傷）となったり、学生との間に感情的な溝ができてしまうかもしれません。学生の受け止め方というフィードバックだけのためなら、自分だけにわかって他の人にはわからない、というやり方の方がいいと思います。いずれにせよ、こういうことをやると、教育方法についてどんな理論を学ぶよりもずっと実質的に自分の講義などの改善に役立つでしょう。

もう一つ、この理工系大学院改革研究会に出ていて、今長尾先生がおっしゃった京大卒業生の特徴のようなことを考えさせられました。東大の卒業生の場合、例えば企業の人事担当者からのヒアリングをしますと、大学院重点化でこれから東大で博士号を取る人がいっぱい出てきます。そういう人を企業で喜んで取ってくれるかという問いに対して人事担当者の方は「ノーサンキュー」と率直におっしゃいます。修士号だけで来てくれるのはいい、必要ならうちで研究してもらって博士号を取らせる。東大で博士号まで取ってきてくれたらあとどうにもならない。こういう言い方です。他の大学はどうかというと、京都大学の卒業生の場合には非常にクリエイティブな面があって、という評価です。これはイメージの問題なのか、本当にそうなのか、私にはわかりません。小耳に挟んでいるだけです。ただ、先ほど長尾先生がおっしゃった京大の工学部の卒業生がよそに比べて評判がいい、ということはあるように思います。

[石村雅雄・センター助教授]

先程、高橋先生の方からこの調査に関して、先生方が授業される時に京大生がいったい今何を考えているのかということの一つのきっかけとして、例えばミスターチルドレンを聞いてみようとか、マスターキートンを一回読んでみてはどうか、という話をされました。それと同じ立場から、この調査の見方として少し話をさせていただきます。

一つは、「この一年間に読んだ本の中で京大生のおすすめの本はどれか」という調査結果。この右側の集計は、実は私がこのコンピュータ時代に、両高橋先生に怒られそうなのですが、白い紙を用意しまして、正の字を書いていつて集計していったものです。この回答総数は、1021にものぼります。しかしここでは『ソフィーの世界』が22で最高となっています。ということで、用意した白いB4の紙を継ぎ足し継ぎ足して、研究室の半分が埋まるくらい本の題名と作者の名前が出てきました。これには非常に驚きました。つまり現在の京大生について、「今これが京大生像だ」というふうに言うことがなかなか難しくなっているということなのです。非常に多様化している。人間というの

はだいたい面白いことがなければ著名な教授の命令でも動きませんので、教育学研究科と経済学研究科の院生に手伝ってもらって集計して、「マルクスが第何位に入ってくるか」という賭をして、この集計をやったわけです。マルクスは全然入ってこないんですね。1冊だけ『資本論』が出てきただけで、他の著書は全くでてきませんでした。これ一つを見ていただいても参考になるだろうと思います。正直なところ司馬遼太郎さんがここまで出てくるというのも予想外でした。まあ去年この調査の段階で司馬遼太郎先生が亡くなられたので、その影響もあるのではないかという見方もしているんですが、これはいらぬ解釈でしょうか。それから二つ目ですが、この表を見ていただくとわかるように、薬学部と教育学部は女性の回答者の方が多いという特徴があります。このためにいくつか興味深い特徴が出ております。例えば「あなたの趣味は」という問いに対する回答、10番目に「パズル」というのがありますが、教育学部と薬学部だけ異常に高い数字です。他に教育学部と薬学部で特徴的な所を見ますと、「音楽鑑賞」「カラオケ」そして「マンガ・コミック（の低さ）」「映画館で映画を見ること」。それからさらに「お酒」という欄がありますが、これを見ると非常に興味深い数字がでていまして、総人・教育・法・経済このあたりは比較的数字は高いですが、他の学部に行くと例えば文学部の学生なんていうのはお酒を飲みながら論を戦わせる、といったイメージがあったのですが、実際にはそう高い数字にはなっていない。このところを見ていただだけでも、現在の京大生像、先生方の教えていらっしゃる学生たちの比較という点で、考えてみていただく一つのきっかけにはなるのではないかと、というふうに思っております。

それから、先ほども梶田先生から紹介のあったことなんですが、芸術関連の科目についての要求が強い、という点について触れておきたいと思います。私がリレー講義の形で「大学論」という授業をやっているんですが、学生たちに対して授業中アンケートをしながらやっている中で、音楽とか絵画に対して学生の興味が非常に強くなっていることを感じています。この辺は、我々がこれまでの考えを捨てて新たな教養像を求めていかねばならないということを示唆するものではないかと思えます。

最後に、学生たちの実用志向が非常に強くなっていることですが、「もっと実用性の高い科目を増やすべき。」という声が44.7%あります。この辺に関しては語学の問題ともからむのですが、語学の在り方ということで、例えば昨年京都大学に教養教育について視学委員が来られました。その方が学生にインタビューをしたら、学生たちは語学に対して実用性をもっと高めて欲しいと言ったそうです。具体的な要求としては、ブリティッシュ・カウンシルの語学講座といったものを大学の単位として認めてくれないか、と東大の名誉教授の視学委員の先生方に言ったそうです。その中で「フランス語なんか知らないんじゃないか」と東京大学のフランス語の大家の先生に向かって京大生が言ったそうなんですが、僕は冷や汗がでてしまいました。そういったところの実用志向ですね。語学をどう考えていくのか、実用志向ということをどう受けとめていくのか、という点でもこの調査結果を活用していただくとありがたいと思います。

〔喜志哲雄・文学部長〕

午前のオリエンテーションの前に少し時間がありましたので、ひとわり調査結果を拝見していたんですが、大ざっぱに言うと二つ感想があります。

一つは、こういうことを言うと威張っているように聞こえるかも知れませんが、だいたい私が想像していたような京大の学生像とあまり変わりませんでした。というのは私は文学部の英文ですが、いい年をして割合学生とカラオケに行ったり、お酒を飲んだりしていますので、普段接していただいていたズレいていませんでした。学部による違いというのはありますが、一般的にはコミックが好きで、音楽の好みがどうでという、まああいうものは昔なかったんで、今はあいうものが当たり前なんで、それからどういう本を読むとか、あんまり違和感はありませんでした。

それからもう一つ、これはある意味でやや驚きでかつ安心なんですが、全体として非常に健全だという印象を受けました。というのはいろいろ中身がありますが、満足度が結構高いということ、あんまり簡単に単位を出すとか、自由も結構だけど度が過ぎる、といった意見が出されていることなど、安心です。ただ全体を通じて、これはずっと近年感じていることは、エリート意識というのが全くないということです。これは梶田先生が1960年入学、私は54年入学でもうちょっと前なんですが、あの頃の学生はエリート意識のかたまりみたいなもので、つまり我々がしっかりしないと日本はダメになると思うわけですね。私自身はノンポリでしたけど、デモに行ったりいろいろ暴れたりする

学生がたくさんおりました。しかし今の学生には、自分たちが日本を背負っているという意識は全くないと思います。これはある意味ではいいことです。昔のエリートの意識は鼻持ちならないという面がありましたから、それが無いというのは結構なことなんです、しかしまたああいう時代を知っている人間としては非常に物足りない。要するに京大生というのは話を大ざっぱにすると日本の他の大学の学生に比べていくらか成績がいいだけで、他の点では全く同じじゃないかと思うんですね。だから音楽とかコミックの本、結局はベストセラーですね、要するに。特に京大生だからということは全くない。たぶん他の大学で同じような調査をしてもあんまり変わらないだろうという感じがします。

じゃあエリートでない学生にどうやって教育するかということになりますが、これは実は私には今でもわからない。まあ私はあと一年あまりでやめますのでもうしょうがないのですが。いまだにそれがわからないので、私自身はエリート教育をやっているんです。英文で読めない学生に一生懸命、もうぎゅうぎゅうやってシェイクスピアを教えているわけです。いじめぬくんです。最初の一月か二月ぐらいは、ほとんど毎行辞書を引かせないと読めない、単語の意味が全く今と違いますから。ただ教師というのは基本的に人が良くないとつとまりませんから、夏休み過ぎぐらいになると、一時間に例えば50行から100行ぐらい読めるようになる、そうすると大変うれしいわけです。そこにかろうじてもってきたわけなんです、しかしこれでいいのかどうかというのはいまだにわかりません。

[梶田]

ありがとうございます。京大生は今でもある意味でのエリート意識をもっているのかもしれませんが、国家社会を考えた中でエリート意識は本当になくなっているな、と私も感じています。

[益川敏英・基礎物理学研究所長]

今回調査報告を見て、京大生の考えていることがかなり詳細に報告されたんですけど、その中で僕は多少不安に思ったことがあるのです。京都大学の先生方がいったい学生に何を望んでいるのか、そのメッセージを学生にどう伝えているのか、それに対して学生がどう考えているのか、といったことに関してはほとんど何もない。教育というのは僕は学生と教官が対等だとは思いません。学生が望んでることを満足させることが教育だとは思いません。基本的には僕は孫悟空とお釈迦様の関係が一番望ましい教育の立場だと思います。お釈迦様の手の中で孫悟空が自由に動いていると思っているけど、お釈迦様の設計したとおりに動いている。それが本来の姿だと思うんです。しかし今日の京大を始めとして、教育の時学生がどういう質問を持っているかということもあるんだけど、実際に教官が自分の学問から見て京大の4年間の間に一体何を受け取ってほしいのか、ということを伝えているのか。学生はそれをどう受けとめているのか、です。

私は理論物理学なのでそういった立場から言いますと、大学に入った時に一番面白かったのは数学でした。高校から大学に入ってきて受けた講義、あっこれは明らかに違うぞ、大学の授業を取って一番ショックを受け、かつ面白かったのは数学。物理学は全然面白くなかった。高校の延長みたいなところがありました。今思ってみても、自分にそういう講義をやれといわれてもできません。それは明らかに数学の準備があり、物理学に対してもある程度の準備ができてはじめて現代物理学のおもしろさがわかります。私の経験からいいますと、しんどかと思うのは理学部の物理教室で大学院を教えていたときに、非常に理論志向の学生が多いんですね。これを考えてみたら当たり前のことなんで、学部教育までいずれにしても受ける講義というのは基本的に理論なんです。実験に関わることで、実験に関する理論です。本当に実験のおもしろさがわかるのはM1・M2になった段階なんですね。それは学問の発展状況によってある意味ではやむを得ないことなので、やっぱりそういうストーリーというか、この学部の場合にはこうだと、だから1回・2回・3回・4回生のあたりではこういうことに十分に慣れていってほしい、というメッセージをどれだけ伝えるか、ということが一番重要なことになるのではないかと思います。

学生が素朴に感じている「面白くない・面白い」などはそんな大した問題ではないと思うんですね、僕は。自分自身を含めてなんです、学生達にどれだけ正確に、教官から、自分の学問領域、実績を持っているものとして、メッセージを伝えているのか。それをどれだけ学生たちが受けとめているのか、ということが一番重要なことなのではないかと思うのです。

[梶田]

今、ご発言いただいたことは非常に重要なことだと思います。ただ我々考えなければいけないのは、今年18才人口170万。5年前が205万、2010年には120万。2百何万でやっていたのが120万にまで減るわけです。今年の大学への進学率は47%ですが、2010年には少なくとも65%から70%ぐらいになる。そうすると京都大学はどうなるか。たぶんもっと進学競争が厳しくなるでしょう。どこかの大学に必ず入れるようになったら、無理してでも他の人の行かない大学へ、という要求はかえって強まるのではないかと思います。そうした大学の大衆化の中で、学生のあり方は確実に変わっていくでしょう。京都大学に入るのが今より難しくなったとしても、それがそのまま今より考え深い学生、創造的な学生、賢明な学生の入学を保証するものではありません。今よりもっと瑣末な知識だけを表面的に詰め込んだ学生を引き受けることになるのかもしれませんが。しかも、大学院重点化ということで今までの何倍もの博士課程の学生を引き受けるはめになっています。つまり4年間で出ていく学生はまれになり、6年間で卒業する学生もこれからはまれになっていって、多くの学生が9年以上京都大学で過ごすようになります。そして以前は、大学院まで行った人は我々の後継者として、まさに我々のやってきた研究の喜びとか悲しみをそのまま伝えるべき、と思って指導してきたわけです。ところがこれからは学位を取った人であっても必ずしも我々の後継者にならなくなります。大学とか研究機関のポストはそれほど多くないですから。それに日本がいくら豊かになったとしても、研究だけの人を大勢養っていくほどには豊かにならないでしょう。そうすると学位を取った人のかなりの部分も、必ずしも四六時中その学問のことだけを考えているということではなくなる。社会に出ていろんなことをやっていくことになる。つまり我々が極めて高度な学問的なトレーニングをした人たちが我々の後継者として同じ道をたどっていくわけではない。そういう時代に否応なくなっていくつつあるわけです。そうすると片方で進学率が大幅に上昇する中で京都大学の受験生はどういうタイプの学生になるのか。片方で大学院重点化の中でみんな京都大学での滞在年数が長くなる、学問的に高度なトレーニングを受けて学位をもらうようになる、しかしだからといって研究的な仕事にはなかなかつけない。そういう時代がもう目の前にきているわけですが、こうした状況の変化を大前提に我々は教養教育の問題を、専門の下地をどうつくるかということを考えないといけなわけです。今鋭いご指摘がありましたが、学生に阿るということはあってはならないことです。学生の言う通りにする必要もありません。けども、今の学生がどういう特徴を持つ存在なのか、がわからなければ教育できないのです。この辺の狭間で考えていかなければならないのではないかなという気がします。

そういうことで必ずしも十分にネタの提供ができたのか自信はありませんが、京都大学の教育の見直しに当たって、卒業生調査の報告と、4回生調査の報告とを、今後の議論の土台として使っていただければと思います。

最初のお約束の通り、9時になりましたのでこれで一応終わりたいと思います。しかしまだ関係の皆さんがおられますので、それぞれの方を囲んで細かい話し合いを続けていただければ、と思います。どうもありがとうございました。

【資料】

全学共通科目レビュー委員会調査小委員会『京都大学の教育と学生生活——4回生の意見』1997年5月。

京都大学高等教育教授システム開発センター『京都大学卒業生の意識調査——京都大学で受けた教育の評価と人生観』1997年3月。

「歴代卒業生にアンケート／京大生、学歴信仰膨らむ」日本経済新聞（1997年5月18日）。